

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅱ8章16-24節>
熱心と冷静、神の目と人の目、そのどちらも合わせ持った信仰を。

1 「熱心」であることが強調されている。

貧しいエルサレムの教会を援助するために、パウロがテトスをコリントの教会に遣わして募金を集める際に語ったことが記されています。ここでは「熱心」であることが強調されています(16, 17, 22[2回], 19[熱意], 7)。それは募金の取組に対する熱心ですが、私たちへの神様の恵みに対する感謝から出た熱心です(19「慈善の業」の「慈善」は本来「恵み:カリス(8:1)」と訳される語)。信仰者が持つことのできる熱心さとはどういうものであるかをよく表していると言えるでしょう。

2 しかし「熱心」であればいいわけではない。

しかし、この熱心をもって取り組めば全てうまく行くわけでもありません(12:16-18)。どんな場合でも誹謗中傷する人がいるものです。だからこそ、パウロはそういう場合に備えてよく準備しています。ここでテトス以外に二人の人を同伴させているのはそのためです(18, 22)。パウロ自身がこう語っています。「わたしたちは、自分が奉仕しているこの惜しまず提供された募金について、だれからも非難されないようにしています。わたしたちは、主の前だけではなく、人の前でも公明正大にふるまうように心がけています」(20-21) 神様の恵み(自分のような者を罪赦し救って下さった!)に答えて生きる熱心を持って生きることは大事です。しかし、人の罪で満ちたこの世で理不尽な目に遭うことは、そのような熱心を持って生きる時にも起こります。神様のせいではなく、人間の罪のせいです。そのことを思ってしっかり備えて取り組む冷静さを持つことが重要です。そうしたら、いずれあらゆる誤解は解けるでしょうし、解けなくてもそれこそ、相手を恨むのではなく人間の罪を思う中で、神様は知っておられ、神様は必ず道を用意して下さっているし、その道を歩めばいいのだと思えるようになるのです。

献身者を判断する際に、内的照明(召命)と外的照明の両方があることが大切です。内的照明とは、自分の中に神様に召されたという思いがあること。これさえあればよさそうな気がしますが、そうではないのです。外的照明、すなわち、回りの人たち(信仰者)も良しと考えるかの判断も大事にすべきなのです。自分の思い込みでなく、神様に聞き、人にも聞く、そこにちゃんと成り立つ信仰を求めていきましょう。